



## を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

**小** 生はある私立大学で講義を担当している。この四月、例年のごとく第一講を開始したとき、例年とは学生たちの様子が打って変わっていることに驚いた。例年だと私語が漏れたり、なんとなく弛緩した空気があり「くっそう、講義の中身でお前たちを集中させてみせるぞ」と突っ張るのだが、今年の学生は違った。眼を大きく見開き「さあ始めてください。一語も聞きもらしませんよ」といった風情である。

**講** 義が終わって「あれは何だ」とあらためて考えた。直ぐに思い当たった。就職戦線の様変わりだ。ここ5・6年の先輩たちの100%近い就職状況を見て、高をくくっていた学生たちは、俄かな世界的大不況のあおりで、自分たちの代の就職戦線の大暗転を予想し緊張しているのだ。社会的状況の困難化は人々に緊張をもたらす。ある意味ではいいことだ。

**し** かし、と考える。学生のほとんど全員が就職して組織に身を委ねることを当然としているのか。就職するのはいいが、その前にこの世の出来上がったシステムとは別の次元で、もっと自分と向き合って、自分を大切に育てることを考えていないのだろうか。

**そ** こでこの本である。この世間的な成功には余り関心がなく、個性豊かに自分の仕事をした、あるいは生きてきた15人の人物の評伝である。あとが

きで著者はいう。

**一** 『二列目の人生』といったタイトルは、記念写真になぞらえている。卒業写真などでおなじみだろう。写真の二列目、まん中にクラス担当や学級主任といった教師がいると、その左右に委員長、副委員長、さらに隣合って役つきの優等生がすわっている。

**二** 列目はどうだったか？ 写真では二列目のはしっこでソッポを向いているが、ポスターを描かせると、やたらにうまかった。運動会になると、がぜんスターになった。弁当の早食いにかけては誰もかなわない。なぜか女の子に人気抜群というのもいた

**そ** う。この本には功なり名遂げた二列目の有名人に対して、名こそその影に隠れているが、自分に納得のいく生き方を、あるいは仕事をした二列目の人物の生き様が活写されている。

**た** とえば植物学者<sup>おおうえ ういち</sup>大上宇市である。民俗学者としてあまねく知られる南方熊楠が二列目に座しているとすると、二列目に小生もはじめてその名前を知った大上宇市がいる。学歴はほとんど無いが兵庫県揖保郡に住み地元の植物を調べつくし、早魃による飢饉の惨状を目のあたりにして多くの貴重な研究を残す。中央の農学博士を

「現実を知らない頭でっかち」と批判し学会から嫌われる。名もなく、常に貧しく、好きな植物学の膨大な研究資料を残して、77歳の人生を終える。

**そ** してたとえばヴェンセスラオ・デ・モラエス。明治期に来日した外国人の中で、もっともよく知られる一人はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）であろう。松江中学英語教師、東京帝国大学英文科講師と官の道歩み、日本を深く愛したと信じられている。しかしこの本によれば「ハーンは著書のなかで神秘の国日本をほめたたえたが、現に目の前にある日本と日本人をさほど愛していなかったことは、その書簡が示している。彼はそこに、くり返し嫌悪と不快を書きつづけた」そのハーンの背後の列に我々のあまり知らないポルトガル人モラエスが

**モ** ラエスは神戸の領事を辞してのちは、いっさいの公職につかなかった。『民』に沈んで、ひたすら一人の市井人になろうとした」徳島の長屋の二階にひっそりと住み、晩年の16年間を日本を感じ、日本に浸りながら過ごすのである。

**夏** は窓を開けはなして簾を下げている。冬は障子ごしにやわらかな光が射しこんできて、まるで『真珠の中』にいるような気がする」

**日** 本通信』全6巻を残して、徳島の地に眠る。



◀『二列目の人生—隠れた異才たち』池内 紀著  
集英社文庫  
定価 本体476円＋税